

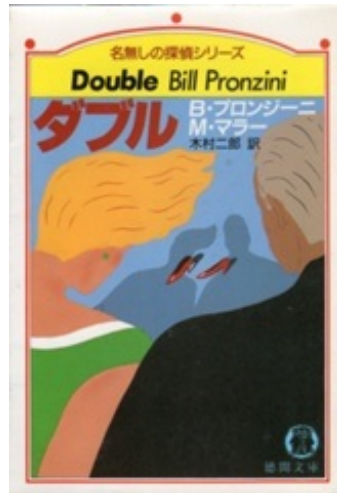


# 名無しのオプとシャロン

---

tontokaimo39

---



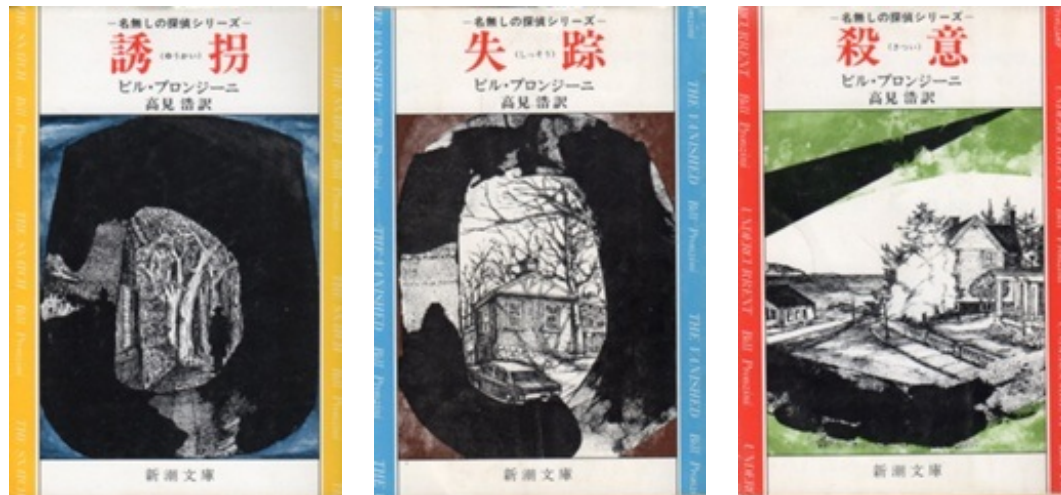
名無しのオプは、ビル・プロンジーニ、シャロン・マコーンはマーシャ・マラーによって生み出されたハードボイルドミステリーの探偵です、ハードボイルドといっても、オプはフィリップ・マーロウのような、あるいは007のようなカッコイイ探偵ではありません、咳が出るので肺癌の心配に悩み、彼女に去られて落ち込んでしまい（後別の女性と結婚しますが）唯一の趣味がパルプマガジンの蒐集という、どちらかというと情けない探偵、シャロンは女性探偵ですが、合気道や空手の達人で兇悪犯を一瞬で倒すような、現在ではよくあるタイプの女性探偵ではありません、鳥が怖くて、チョコレートが好きな平凡で普通の女性なのです、二人の共通点はもう一つどっちも人情に厚いこと。

で、二人の関係や、より詳しいことはこれからあげる本を読んでいただきたいのですが、揃えて入手は難しいかも...一冊ごと個々の事件は、独立しているのですが、二人の人生は連続して動きます、オプは友人と探偵事務所を共同経営したり、喧嘩をして別れたり...そのため、もし読まれるなら掲載順に読むとより面白いのですが。

文庫本が大好きで（本当は文庫本しか買えなくて）いろいろと買い求めました、その本が今は埃を被り赤く焼けかけているのですが、どれもかつては夢中になって読んだもの、よしもう一度日の当たるところへとネットへの掲載を考えたのですが、でたらめにあれやこれやと言うわけにもいかず、少しまとまっているものを選んだのが、この名無しのオプとシャロン・マコーン、私の本当に好きなミステリーは本格の方で、ハードボイルドはあまり好みではないのですが、それでいて夢中になれたのが、この二人の活躍だったという次第です。

名無しのオプという呼び方は、本当は間違いなのだそうですね、オプは〇〇の調査員で、コンチネンタルオプはコンチネンタル探偵社の調査員、名無しのオプは個人なんだからオプというのはおかしいということです、しかし普通は名無しのオプと言い慣わされているので、ここではそ

のまま使いました。



誘拐・・・S52年 訳 高見 浩 新潮文庫

子どもを誘拐された父親の依頼で身代金を届けに行くが、事件は意外な方向へ...霧のサンフランシスコを舞台にしたサスペンス。

失踪・・・S53年 以下同上

恋人の愛を失い失意の探偵の前に現れたのは、不安そうな様子の女性依頼人...挙式寸前の婚約者が姿を消してしまったという。

殺意・・・S55年 以下同上

素行調査の依頼のために尾行を開始したが、目的の男はコテージで殺されてしまい...古いペーパーバックのミステリーに絡む殺人...



死角・・・S56年 訳 高見 浩 新潮文庫

湖辺の葦の茂みに無造作に置かれていた見知らぬ娘の死体、その財布の中になぜかオプの名刺が...身辺警護を依頼され男を尾けているとまたしても死体が...

脅迫・・・S58年 以下同上

パルプ・マガジン作者に届いた盗作だと言う脅迫状、パルプ・マガジン大会で起こった奇妙な密室殺人...友人の無罪を信じて絶望的な調査を...

名無しの探偵事件ファイル・・・S59年 以下同上

無名探偵シリーズの短編集、新潮社からの依頼に応え、日本の読者のために書かれた異色作、日本の読者へ宛てたメッセージも入っている。

○顔のない声 ○盗まれた部屋 ○ラギダス・ガルチの亡霊 ○オウローヴィル貨物駅





復讐・・・S60年 訳 高見 浩 新潮文庫

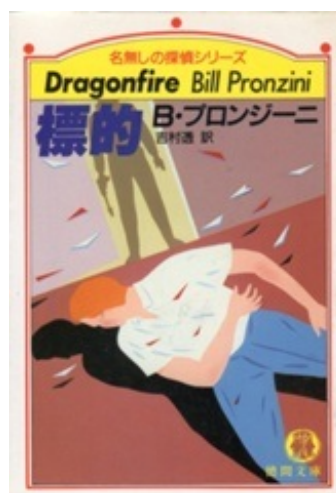
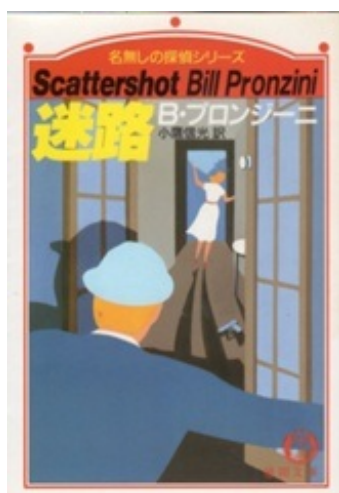
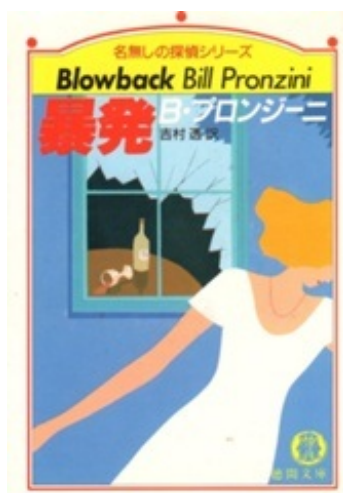
日系女性からの依頼は、差出人不明のところから高価なアクセサリが次々と送られてくると言うこと、調査を引き受けたオプはやくざの内紛に巻き込まれ...

これは長編だが、やはり日本の読者のために書かれたもの、新潮社は先の短編集と合わせて長編の書下ろしを依頼していた、それに応えてくれたのがこの編、米国版の題名は「Quicksilver」

画像のスペースが余ったので-----

オプの趣味はパルプ・マガジンの蒐集、彼はそのコレクターの大会で事件に巻き込まれたことも...

パルプ・マガジンとは要するにざらざらの粗悪な紙に印刷した娯楽雑誌で、一般には低俗なもののみなされていたようですが、プロンジーニ自身コレクターとして有名だったそうです。



暴発・・・1987年 訳 吉村 透 徳間文庫

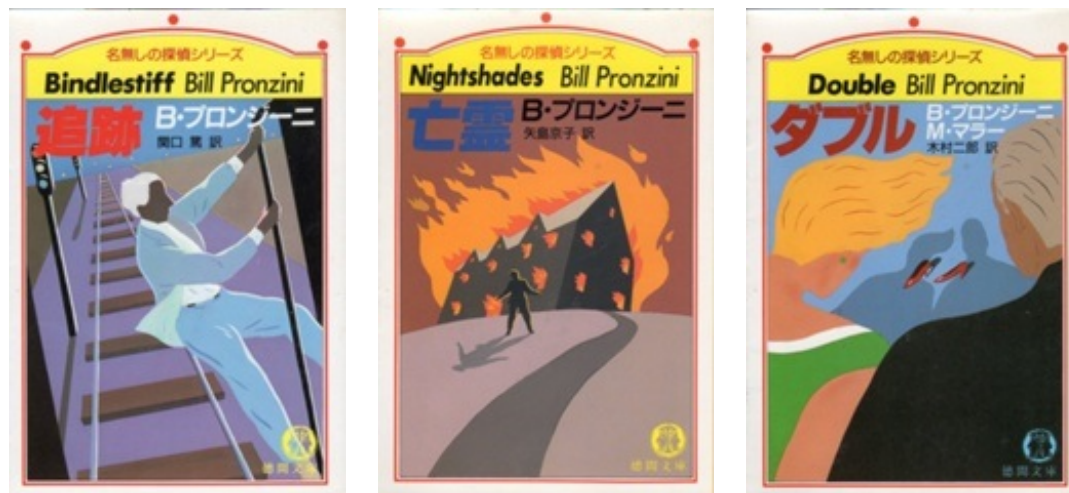
断崖からヴァンが転落、だが乗っていた男は、転落前に殺されていた...現場付近にはなぜかクジャクの羽が...

迷路・・・1987年 訳 小鷹信光 徳間文庫

警備、尾行、住所確認、どれも楽な仕事のはずだったが...ねじれにねじれ、探偵免許証まで取り上げられそうになり...

標的・・・1988年 訳 吉村 透 徳間文庫

親友エバハート警部補の自宅で談話中玄関のベルが...エバハートが席を立った途端二発の銃声...エバハートもオプも撃たれたが犯人の手がかりはまったく無く。



追跡・・・1988年 訳 関口 篤 徳間文庫

もと砂金の町を舞台に、十五年前の殺人事件が暴き出され、やがて新たな殺人が...

亡霊・・・1989年 訳 矢島京子 徳間文庫

保険会社の依頼により焼死事件の調査を...火災は失火か、放火か？調査開始早々新たな事件が...

ダブル・・・B・プロンジーニ M・マラー 1989年 訳 木村二郎 徳間文庫

探偵大会に参加したオプ、オプを父親のように慕う女性探偵マコーン、ホテルからの墜死事件を共同で調査しようとした二人に危険な罠が...





「ダブル」は名無しのオプとシャロン・マコーンがコンビを組んで活躍。

というのも、これはビル・プロンジーニとマーシャ・マラーの共作、そこでそれぞれの探偵が登場するわけですが、実はビル・プロンジーニとマーシャ・マラーは夫婦なのです。（オプとマコーンと言うよりビルとマーシャと言うべきか...）

「標的」の献辞・・・「本書を最良の女性探偵、シャロン・マコーンと彼女の生みの親、マーシャ・マラーに捧げる」

「チェシャ猫は見ていた」の献辞・・・「ビル・プロンジーニと敢えて（名無し）としておくもう一人の人物に」

なんだかあてられてしまいそうです...笑

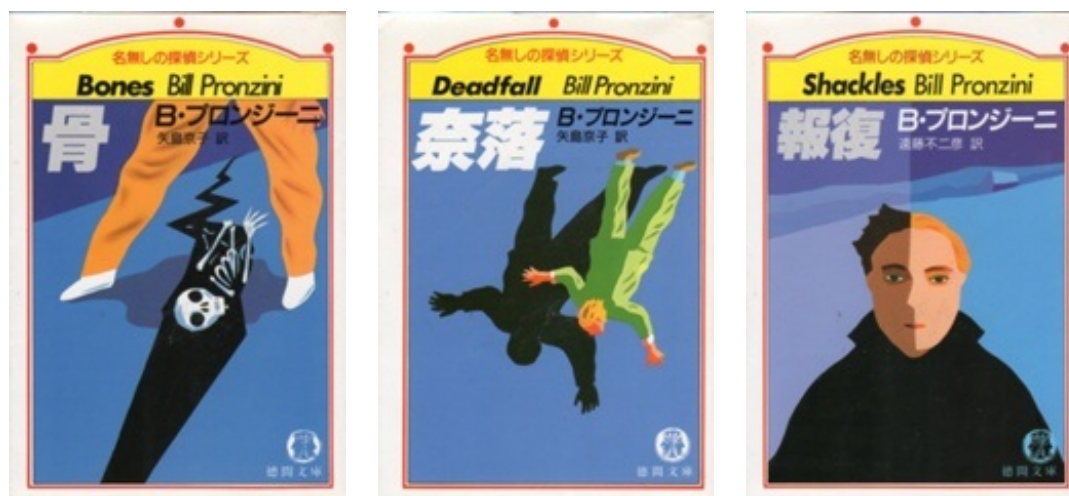
ビル・プロンジーニには、他の作家との共作もあるのですが、特にマーシャ・マラーと組み合わせたのはこういうわけです、読んだのはかなり以前なので間違っているかも知れませんが、シャロンの活躍する作品の中にオプが登場する場面もあったと記憶しています。

画像のスペースが余ったので-----

夜明けのフロスト・・・2005年 光文社文庫

アンソロジーですが、ビルとマーシャの共作が載っています。





骨・・・1989年 訳 矢島京子 徳間文庫

父親の自殺の動機をとの依頼だったが...調査で出てきたのは自殺などしそうにない父親の実像と身元不明の骨が...

奈落・・・1990年 訳 矢島京子 徳間文庫

殺人を目撃、被害者が死の寸前に呟いたことばは奈落

報復・・・1990年 訳 遠藤不二彦 徳間文庫

人里離れた山小屋に拉致されたオプ、シリーズ最大の危機がオプの身に...



兇悪・・・2000年 訳 木村二郎 講談社文庫

老いたオプだが、ある女性から父親捜しを依頼され...苦勞の末突き止めた父親の正体は...

幻影・・・2003年 訳 木村二郎 講談社文庫

親友でありかっのパートナーのエバハートが死んだ、自らの胸を撃ち抜いて...依頼された消えた女を追いながら、エバハートの失意の日々をたどる。

依頼人は二度襲われる・・・1980年 訳 宮脇孝雄 文春文庫

コリン・ウィルコックスとの共作、オプはサンフランシスコ市警ヘイスティングス警部と組んで殺人事件を追うが、... (ツースポット) と書かれたメモは何を意味するのか...

コリン・ウィルコックスのヘイスティングス警部シリーズの一冊、名無しのオプからは、いわば番外編、この中でオプはビルと呼ばれている。



タロットは死の匂い・・・ 1991年 訳 深町真理子 徳間文庫

アパートの隣人が絞殺された...タロット占い師は、それを預言していたというが...チョコレート中毒、鳥恐怖症のシャロンは調査を開始。

チェシャ猫は見ていた・・・ 1991年 訳 大村美根子 徳間文庫

友人が殺された、死体には赤いペンキが...唯一の手がかりは（チェシャ猫の目）

安楽死病棟殺人事件・・・ 1991年 訳 広津倫子 徳間文庫

行方不明のルームメイトの搜索を...依頼を受けたシャロンは不明者の故郷に向かうが、そこには彼女の刺殺死体が海岸に...





殺意の日曜日・・・ 1993年 訳 小尾美佐 徳間文庫

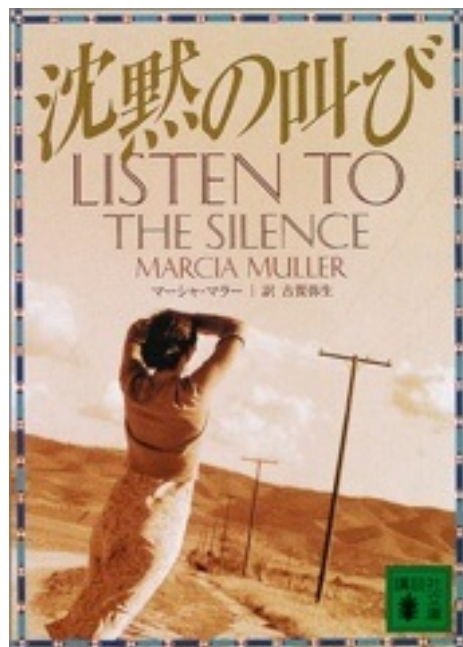
田舎出の男を尾行中、尾行の依頼人が殺されて...シスコの裏町を舞台にシャロンは事件の核心へと迫るが...

カフェ・コメディの悲劇・・・ 1994年 訳 大村美根子 徳間文庫

人気女性コメディアンが失踪、殺人と断定され友人のポピーが逮捕された、無実を訴える彼のためにシャロンは調査にのり出すが...

奇妙な相続人・・・1995年 訳 広瀬倫子 徳間文庫

反戦運動家が通り魔に襲われて死亡した、彼の友人遺言執行人は、彼の死の三週間前に遺言が書き換えられていることを知る、そこに犯罪の匂いを嗅いだシャロンは...



沈黙の叫び・・・2004年 訳 古賀弥生 講談社文庫

父の死をきっかけに養子であったことを知ったシャロンは、自分のルーツを求めて母方の一族が住む先住民シヨシヨニ族の保留地へ...彼女の生い立ちには現在につながるある事件が...



名無しのオプもシャロン・マコーンも、ミステリーファンにとってはおなじみだと思うのですが、それ以外の方には、聞きなれない名前だったかも知れません。

ご教示くださいと書いていたのですが、何気なく「沈黙の叫び」を開いて訳者あとがきを読むと、シャロン・マコーンシリーズの最初は「人形の夜」と書いてありました、（これは知っていたのですが、持っていないので忘れていた）そして作品一覧が載っているではありませんか、あとがきとか解説は大抵ヨイショしてるだけだと、ほとんど読むことはしなかったのですが、これによると、2004年現在、22編さらに新作を執筆中とのこと。

慌てて「幻影」を開くと、名無しのオプは、2003年現在長編29編、短編集4冊とのこと。

この二冊で見ると、限り、「人形の夜」を除いてここに掲載した以外邦訳は無いようですが、これ以後の状況と邦訳があるようでしたらご教示お願いします。

## 名無しのオプとシャロン

<http://p.booklog.jp/book/104722>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104722>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104722>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ